

2020年1月25日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 康乃琪 学生番号 6D502

〈論文題名〉 中国人日本語学習者による特殊拍の生成について
—句レベル、文レベルを中心に—

The Production of Special Moras by Chinese Learners of the Japanese Language
—With a Focus on Phrases and Sentences—

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 木村 政康

副査 外国語学部教授 齋藤 純男

副査 外国語学部教授 安富 雄平

I 論文の主旨

本論文は日本語のリズムの等時性に着目して、音連続、文における特殊拍の生成を論じたものである。

日本語のリズムは、「日本語らしさ」に関わる重要な音声要素の一つであり、学習者にとって習得が容易でない項目である。日本語のリズム生成に影響を与える要因の一つは、等時性が身に付いているかいないかである。拍の持続時間に関する従来の研究には、語単位における特殊拍の生成や聞き取りの傾向を探るものが多く見られるが、本論文で扱う

「等時性」とは、各モーラがほぼ同じ持続時間で発音されるだけでなく、特殊拍を含む音節は、音連続に位置する場合も、文に位置する場合も、同じ持続時間の比率を持ち発音されるということである。したがって、特殊拍が音連続や文に置かれる場合、学習者の発音の傾向や、特殊拍の生成にどのような影響があるのか、どのような要素に関わるのかを解明する必要があるとしている。

本論文では、まず、テーマに沿った会話調査を通して、文における特殊拍生成の問題点について考察し、その結果、特殊拍の生成は、文が複雑になり長くなるに伴い難易度が高くなるとしている。また、連続する絵カードを利用した発話調査を行い、短文から長文、さらにリズム構造が複雑になる文や文連続において特殊拍の生成にはどのような特徴が現れるのかについても明らかにしている。その結果、単文より文連続における特殊拍生成の難易度が高く、生成の難易度は、「撥音拍<長音拍<促音拍」という順に高くなることが分かっている。

さらに、読み上げ調査を通して、音連続、文において特殊拍の生成がどのように影響を受読み上げ調査を通して、特殊拍を含む語を違う長さの音環境に置いても、その語にある特殊拍は一定の比率で持続時間を保って発音され、語の持続時間長に占める比率がほぼ変わらないという拍の等時性を証明した。日本語母語話者の場合、モーラ数が同じであれば音節数や音環境が異なっても、相対的に同じ長さの持続時間を保つという認識がある。中国人学習者は、音環境が変わるに従い持続時間の制御が不安定になる。この調査結果からも、音声学習や音声指導は語単位だけでなく、フレーズ、文レベルでも行うことが重要であると指摘している。

リズムは言語音声の中でも重要な要素であり、また、第二言語習得においても、初級者から上級者まで習得に努力を要する項目であると言える。リズムの習得は、語単位だけでなく、対象となる語をより複雑な構造に置いて練習していかないと、正しい発音を定着させるのは難しいとしている。

II. 論文の構成

論文の構成は、以下の通りである。

第1章 序論

1.1 研究動機

- 1.1.1 日本語教育の現状
- 1.1.2 音声教育の現状とその重要性
- 1.1.3 日本語学習者の音声学習に対するニーズ
- 1.2 研究の意義
 - 1.2.1 研究目的
 - 1.2.2 リズム教育への貢献
- 1.3 本論文の構成

第2章 先行研究

- 2.1 リズム
 - 2.1.1 リズムの定義
 - 2.1.2 言語とリズム
 - 2.1.3 日本語のリズム
 - 2.1.4 日本語リズムの単位
 - 2.1.5 中国語のリズム
 - 2.1.6 ポーズ
- 2.2 VTS 理論
 - 2.2.1 VTS と本研究との関係
 - 2.2.2 リズムの全体構造
 - 2.2.3 緊張と弛緩
- 2.3 特殊拍の問題点
 - 2.3.1 特殊拍の問題点 ー知覚ー
 - 2.3.2 特殊拍の問題点 ー生成ー

第3章 会話における特殊拍の生成

- 3.1 調査背景及び目的
- 3.2 調査内容
 - 3.2.1 調査方法
 - 3.2.2 インフォーマント
- 3.3 分析方法
- 3.4 結果と考察
 - 3.4.1 全体的傾向
 - 3.4.2 「促音拍の脱落・長音化」および「長音拍の脱落」の生起
- 3.5 まとめ

第4章 視覚情報を用いた発話における特殊拍の生成

- 4.1 調査目的
- 4.2 調査内容
 - 4.2.1 調査手順

- 4.2.2 調査方法
- 4.2.3 調査協力者
- 4.3 調査結果
 - 4.3.1 全体の傾向
 - 4.3.2 特殊拍の時間制御と**母語干渉**
- 4.4 まとめ

第5章 音連続、文における特殊拍の生成調査

- 5.1 調査目的
- 5.2 調査内容
 - 5.2.1 調査方法
 - 5.2.2 読み上げ内容
 - 5.2.3 インフォーマント
 - 5.2.4 分析方法

第6章 音連続、文における特殊拍の生成調査の結果

- 6.1 音連続、文における促音拍調査語の生成
 - 6.1.1 全体的傾向
 - 6.1.2 文の各位置における促音拍調査語の生成
 - 6.1.3 先行する語の影響
 - 6.1.4 まとめ
- 6.2 音連続、文における長音拍の生成
 - 6.2.1 全体的傾向
 - 6.2.2 学習レベル別の誤答率
 - 6.2.3 文の各位置における長音拍の生成
 - 6.2.4 先行する語の影響
 - 6.2.5 まとめ
- 6.3 音連続、文における撥音拍の生成.
 - 6.3.1 全体的傾向
 - 6.3.2 文の各位置における撥音拍の生成
 - 6.3.3 前後の音環境による撥音拍調査語の生成への影響
 - 6.3.4 まとめ

第7章 音響分析における特殊拍持続時間の測定と比較

- 7.1 特殊拍調査語における時間長比の測定・比較方法
- 7.2 促音拍を含む1音節の時間長比平均値の比較
- 7.3 長音拍を含む1音節の時間長比平均値の比較
- 7.4 撥音拍を含む1音節の時間長比平均値の比較
- 7.5 まとめ

第8章 結論

- 8.1. 会話における特殊拍の生成
- 8.2. 視覚情報を用いた発話における特殊拍の生成
- 8.3. 読み上げ調査において特殊拍生成の影響要因の検討
- 8.4. 日本語リズムにおける等時性の証明
- 8.5. 終わりに

III 本論文の概要

第1章 序論

第1章は、日本語教育の現状、音声教育の重要性及び学習者の音声学習に対するニーズ、そして本研究の目的と意義について述べている。音声教育に対する教師個人の裁量に任されており、計画性もあまりないことが指摘されており（小河原・河野 2002: 2-3）、授業現場で主に指導されるのは語彙の発音である。授業の中で知覚・生成できても、実際の会話や発話になると正しく発音できることは少ない。

中国人学習者の発音の困難点のうち、リズムを取り上げた理由は以下の通りである。

- 語に関する研究は多くされているが、リズムの構造が複雑な文レベルの生成に関しては調査がほとんど行われおらず、音響学的見地に立った研究も見当たらない。
- 特殊拍を含む語は、それ自体では比較的単純な構造を持つが、複雑な構造を持つ文レベルに置かれれば、特殊拍の聴取・生成に少なからず影響するはずである。
- 従来の特殊拍に関する研究には、学習者における語の生成や聞き取りの傾向を探るものが多く見られる。
- 特殊拍の知覚や生成に関する研究においては、拍の等時性を考慮することが重要である。「等時性」とは、各モーラがほぼ同じ持続時間で発音されるだけでなく、音節は、短い音連続、長い音連続、文に位置する場合も同じ持続時間の比率を持ち、発音されることである考える。そのため、特殊拍の生成の傾向やその原因を考察するに留まらず、日本語母語話者との定量的な比較からリズムの等時性を把握し、学習者の母語と日本語の時間制御の差異から等時性を検討するとしている。

効率的な指導法の開発を前提とした本稿の研究課題を以下のように挙げている。

- (1) 音連続や文の長さの変化に伴う特殊拍生成にはどんな傾向があるのか。
- (2) 音連続や文における特殊拍の生成に影響する要因とは何か。
- (3) 日本語リズムの等時性をどのような実験調査を用いて証明するのか。
- (4) 中国人学習者が等時性を認識しにくいのはなぜなのか。

第2章 先行研究

第2章では、先行研究における言語リズムの考え方、定義について解説し、本論文の理論的支柱となるVTSについて述べている。

リズムとは、「流れる」の意味を持ち、ギリシャ語から由来し、何か一定の構造が規則的に繰り返し起こられると指摘されている（窪園 1993: 62）。また、木村(2015: 32)では、「言語リズムとは、音連続において、聞こえの頂点がそれぞれ等時的に繰り返す、その時間的間隔であると、また、その時間的間隔の繰り返しにリズムがあると感じ、生理的な心地良さを覚える」とし、音連続における等時間的間隔の繰り返しに、さらに、その繰り返しによる生理的間隔を加えて定義としている。また、「リズムの単位をどこに設定すれば、リズムの指導に直接結びついて行くのだろうか」とし、音声指導におけるリズム単位について問題提起している。

本研究では、日本語リズムの特徴としての等時性を重視する意味で、リズムを「ポーズで区切られた構造（音連続）が、一定の規則性のもとに、等時的に繰り返されること」と定義し、特殊拍をリズムの一部として捉えることにより、日本語リズムとしての特徴が際立つとしている。「等時性」について、音連続のモーラ数の増加とともに、音連続や文にあるモーラが一定的な比率の持続時間ももち発音され、モーラの長さを物理的に確定的に測定することは困難であるが、発音された音連続においてモーラが占める比率は測定できるとし調査した。

日本語学習者を対象としたリズムに関する研究では、語における特殊拍生成の研究は多くあるが、音連続や文における特殊拍生成の問題はまだ十分に検討されていない。また、等時性の存在やその特徴に焦点を当てたものは見当たらない。特殊拍生成の問題点の原因解明と解決法に向けて音響学的手法を駆使し、VTS 理論に裏打ちされたより深く詳細な研究が必要だとしている。

第3章 会話における特殊拍の生成【予備調査1】

第3章では、テーマを定める形で会話調査を通して、文における特殊拍生成の問題点について考察している。

まず、中国人日本語学習者にとっては、特殊拍を1拍としての持続時間を制御し、正しく発音することは非常に難しい。初級者だけでなく中級や上級の学習者でも、文の中ではリズムの構造が複雑化するため、影響する要因も多くなり、特殊拍の生成は一層難しくなると問題提起している。

次に、本稿の【予備調査1】では、特殊拍に誤りが現れやすい会話において特殊拍の含まれる語を会話のキーワードとして調査を行っている。絵を通してキーワードが発話されるよう誘導している。学習レベルによって生成の問題に差が出たが、会話調査に共通の問題点もあるとし、調査結果を以下の通り示している。

- ① 会話において短文や長文における特殊拍の生成は、文の複雑さ、長さの変化に伴い、生成の難易度が高くなる。生成の難易度は、撥音拍が一番容易であり、長音拍、促音拍の生成がより難しくなる。
- ② 特殊拍の生成は文における位置の影響を受ける。文末の特殊拍は文頭と文中に比

べ、誤りが多く現れる。

- ③ 発音の不自然さは「促音拍の脱落・長音化」と「長音拍の脱落」という2つの傾向として現れている。

誤りの原因はVTSの考え方で説明できるとして以下に示した。

(1) 音環境による緊張度の分布

VT法では、音声的緊張度は音環境により異なる分布を示すと考えている。中国人学習者の発音を観察すると、文末では調音器官が急激に弛緩するため、文末に位置する長音拍も弛緩してしまい、長音拍としての持続時間も維持できず短音化が起きやすい。

促音拍は長音拍より緊張が高いが、文における緊張度は文末に向かうに従い低くなる。文末に近い音環境では促音拍は緊張度を保ちにくくなり、弛緩した発音として生成されることになる。誤りの傾向は、促音拍を含む語が文末にある場合、文末は緊張度が低い音環境であり、促音の1モーラとしての持続時間が維持できず脱落するか、緊張度が低い長音拍で発音してしまう2種類であったとしている。

(2) 全体構造から見たリズムの再構造化

人間のコミュニケーションの手段である言語は構造的な形態を成している。音声言語の構成要素の一つであるリズムも構造を持っている。各モーラがリズムの構成要素として意義を持ち、組み合わせることでリズムは再構造化される。この構造化により、意味を担う語の諸要素が相互に有機的に関連し合い、言語的に新たな価値を生み出し再構造化する。やがて、より長い音連続を形成する文、また、ポーズで繋がっていく複数の文の連続へと導かれ、音声によるコミュニケーションが完成すると全体構造を説明している。

日本語母語話者であれば、語より膨大な音声情報量を持つ短文や長文においても、特殊拍生成の制御機能が働き問題なく発音する。それに対して、中国人学習者では、短文や長文になると、脳への音声情報量が一気に増えて全体構造的に処理することができず、正しい特殊拍の生成に結びつかないとしている。

第4章 視覚情報を用いた発話における特殊拍の生成【予備調査2】

第4章では、第3章の調査結果を踏まえ、連続する絵カードを利用した発話調査における特殊拍の生成にどのような傾向が見られるのかを考察している。調査の手順は以下の通りである。

- (1) 対象者に絵カードを1枚ずつ提示し、絵にある物を指して語の形で答えてもらう。
- (2) 質問に対して、提示した各絵カードの内容を短文の形式で述べさせる。
- (3) 対象者に何枚かの絵を一度ずつ見せる。次に一連の絵の内容を5分ほどで繋げてもらう。絵を順番に見ながら物語形式で内容を説明してもらい、それを録音する。絵

カードは異なった内容にして、キーワードは特殊拍を含む語とする。

(4) アンケートに記入する。

調査結果は、音声データを日本語教育に携わる日本語母語話者4名が聞き、特殊拍が日本語らしく発音されているかどうかを判断しているが、意見が一致しなかった場合は多い方を判定結果とした。次に音声分析ソフトを用いて、単文のデータと文連続や長文における調査語のデータを比較考察し、問題のある調査語に関して以下の点を明らかにしている。

- (I) 単文や文連続にある特殊拍の生成は、単文より文連続における生成の難易度が高い。生成の難易度は、撥音拍が一番容易であり、次に長音拍が、最も難しいのは促音拍である。
- (II) 発音の誤りは「促音拍の脱落・長音化」と「長音拍の脱落」という2種類に分けられる。また、軽音節からなる語は、前後音節を均一に生成する傾向が見られた。調査結果によると、軽音節は重音節とほぼ同じ長さの持続時間で発音され、「重-軽」は「重-重」になり、「非均一」を「均一」にする傾向があると考えられる。

この傾向を調音器官の緊張・弛緩という観点から説明すると、「緊張-緊張」という母語で発音されると、調音器官は「緊張-弛緩」への移動が難しく、特殊拍の前後に位置する自立拍に影響して長音化しやすくなる。中国人学習者の日本語の発話は、特殊拍の緊張・弛緩の交替や移動に対する制御機構が円滑に機能しなくなるため、発音に誤りが現れるのであるとしている。

第5章 音連続、文における特殊拍の読み上げ調査【本調査】

第5章では、第3章、第4章の予備調査の結果に基づき、中国人日本語学習者を対象に読み上げ調査を行い、音連続や文により特殊拍の生成がどのような影響を、すなわち、リズム構造の変化による影響を受けるのか、またその要因について考察している。

まず、学習者が読み上げた音声を録音したものを日本語母語話者に評価してもらい、音声分析ソフトにより特殊拍を含む音節の時間長比を比較した。時間長差を比較するために日本人母語話者の音声データも得ている。

調査に際して、45名の中国人日本語学習者の協力を得た。リズムの長さや複雑さが特殊拍の生成に与える影響を確定するため、調査内容において音環境を追加しながらインフォマンントの発音を観察したが、特殊拍全体の生成の傾向は第6章で示している。

第6章 音連続、文における特殊拍の読み上げ調査の結果

第6章では第5章の読み上げ調査の結果を示しめしている。特殊拍の生成は語などの短い音連続より文で難易度が高くなること、特殊拍生成に影響する要因は位置する音連続や文の長さとその複雑さにあること、文における位置及び前後の音環境のリズムの影響が関

係することの3点であるとしている。

特殊拍全体の生成の傾向は、以下の通りである。

- (I) 特殊拍の生成は、語などの短い音連続より文における方が難易度が高い。
- (II) 文における位置の影響に関しては、緊張度の高い促音拍は「D位置>B位置>C位置>A位置」の順で誤りが現れている。長音拍や撥音拍については、「D位置」において正しい生成が最も難しいが他の位置では難易度に差は見られなかったとしている。緊張度の高い促音拍では、先行する語が「促音拍 (T4) > 撥音拍 (T3) > 長音拍 (T2) > 自立拍 (T1)」の難易順で影響を受ける。それに対して、長音拍は先行する語の影響を受けやすく、文における位置や語の中の位置によっても影響が大きいいため、先行する語の影響順位は見られない。語末に位置する撥音拍は、生成は後続する語の語頭に鼻音があると影響を受けやすいとしている。

音連続や文における特殊拍生成に影響する要因は以下の3点であるとしている。

- (1) 位置する音連続や文の長さや複雑さ
- (2) 文における位置
- (3) 前後音環境のリズム

音連続や文における特殊拍の生成には、リズムの再構造化と調音器官の緊張度が影響している。発話に際して、脳は正しい音声情報を瞬時に調音器官に伝達することで、調音器官は最適な緊張度を選択し音声生成を実現する。同時に、脳は最適なリズム生成に向けてリズムの再構造化を行う。特殊拍のある語は自立拍も含むため、日本語学習者であれば、緊張と弛緩の移動を適切に制御するのは容易ではない。短文や複文のレベルになると、リズムに影響する要素はさらに多くなり、等時性、ポーズ、イントネーションなども考慮して発音しなければならない。中国人学習者は、日本語音声の情報処理が追い付かず、適切な再構造化ができなくなり、拍の等時性にも対処できない。中国語の音節には声調があるため、声調のパターンにより音節の持続時間が変わる。語単位では情報処理が上手く行われても、音連続や文になると音環境が複雑化し持続時間が変動するため、特殊拍生成の難易度も変化する。

第7章 音響分析における特殊拍持続時間の測定と比較

第7章では、それぞれ異なった一連の音連続で特殊拍の持続時間を測定し比較検討している。同じ音節であれば、短い音連続や長い文においても等時性を保ち、同じ時間長の比率で発音されることを証明したとしている。

本稿では、語単位で拍の等時性を調査検証しているが、語の各モーラを測定するのではなく、「2語からなる音連続」、「3語からなる音連続」と「4語からなる音連続、文」のような、長さが違う音連続から、同じ語を抽出して、「特殊拍を含む1音節(2モーラ)の持続時間長/語の持続時間長」を比較する方法で、特殊拍を含む1音節(2モーラ)の語における時間長比で結果を得た。そして、各長さの音連続に同じ語に含まれる同じ1音節

(2 モーラ) の持続時間長比の平均値を比較したとしている。

分析における持続時間の測定・比較から、以下の点が明らかになった。

- (I) 日本語母語話者の時間長比がほぼ変わらずに近似しているのに対して、学習者では音連続が長くなるに従い、特殊拍の持続時間は短くなる傾向がある。ただし、日本語学習者の学習レベルが向上するに従い、特殊拍の持続時間はより安定してくる。
- (II) 「2 語からなる音連続」、「3 語からなる音連続」や「4 語からなる音連続、文」において、日本語母語話者は、持続時間がほぼ等しい比率で特殊拍を発音しており、「等時性」という日本語リズムの特徴が存在することを特殊拍の範囲にはあるが、証明できたと考えられる。

日本語のリズムは等時性という言葉で特徴づけられている。等時性はモーラ（拍）の等時性も言い、各モーラは同じ長さを持つこととされ、日本語のリズムの基本単位とされるのが一般的である。（窪菌 1995: 18）は、「人により発話速度に差異があるが、同じ母語話者は各種のリズム構造において、特殊拍は自立拍とほぼ同じ持続時間で発音する傾向がある」と指摘している。すなわち、モーラ数が同じであれば、音節数が異なっても同じ長さの持続時間を持っていると捉えるのは、日本語母語話者の共通認識である。

本稿では、日本語の等時性は各モーラがほぼ同じ長さで発音されることを意味するだけでなく、前項で述べているように、同じ音節は、短い音連続や長い文においても等時性を保つため、同じ時間長の比率で発音されるのである。それに対して、中国語のリズムは声調や音節構造の影響を受けるため、音環境が変わるに従い、持続時間の制御が不安定になる。この調査結果から分かることは、音声学習や音声指導は、語単位の学習や指導では不十分であるということ、学習、指導すべき発音を様々な音環境に変えて練習させることが重要であるということであろう。

第 8 章 結論

第 8 章では、第 3 章、第 4 章と第 5～6 章の調査結果をそれぞれ照らし合わせ、日本語のリズムにおける等時性を考察すると共に、VTS の観点から本研究全体の結果を考察し、リズム教育の指導方法への提言としている。

本論文では、調査を通して中国人日本語学習者の発音上の問題について、「音連続や文における特殊拍の生成の傾向、また長い音連続が生成に及ぼす影響」といった問題を中心に考察し、誤りの傾向と及ぼす影響の要因を明らかにしている。また、日本語リズムの特徴と言われる等時性を、日本語学習者と日本語母語話者の特殊拍生成の傾向を通して証明している。拍の持続時間は、音環境が変わっても変化しにくく、一定の比率で保たれているとしている。

リズムは言語音声の中で重要な音声要素であり、第二言語習得においても、初級者から上級者までにも習得に工夫する項目である。その習得は、語単位だけの習得だけではなく、対象となる語をより複雑な構造に置き練習していかないと、正しい発音を定着させる

のは難しい。このような学習方法や指導方法を効果的に実践するには、全体構造、リズム、最適要素、緊張・弛緩を十分に考慮することが重要であるとしている。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2012年7月、中国天津師範大学を卒業後、2014年4月本学大学院言語教育研究科博士前期課程日本語教育学専攻に入学、2016年3月に修了、同年4月博士後期課程に入学、現在に至っている。修了に必要な単位10単位は既に取得済みであり、外国語検定試験（日本語）にも合格している。論文提出時の業績は、中間発表会および『拓殖大学言語教育研究』、日本語誤用と日本語教育学会（中国）、日本言調聴覚論学会などの論文や学会発表など計8本となる。博士論文完成発表会は、2019年7月27日に実施された。博士論文は2019年10月3日に提出され、2019年10月6日の言語教育研究科委員会で論文受理が承認されている。審査委員による論文審査は、2019年12月20日、拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果、全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2020年1月13日に実施され、審議の結果「合格」と判定した。

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

従来の、中国語を母語とする日本語学習者における特殊拍の生成に関する研究は、語を中心に調査し検証したものが中心である。筆者は、特殊拍生成の研究には、その対象範囲を語レベルのみだけでは不十分であり、実際の言語活動における特殊拍の生成をも研究対象にしなければ、特殊拍の特徴を詳細に把握することは出来ないと考え、従来扱われていないフレーズ、文まで研究範囲を広げ調査したことは、適切、且つ妥当であると思われる。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

本研究を行うに当たり、国立国会図書館、東京大学図書館に通い、多くの貴重な資料を丹念に収集している。また、日本言調聴覚論学会主催の研究会に参加し、研究者からの助言を仰ぐなど、多くの情報を得て研究を進めたのは、適切、且つ妥当である。

3. 研究方法の適切性・妥当性について

本調査にあたり、2度の予備調査をVT法理論に基づき実施し、その方法、手順が適切かつ妥当であるのか確認した。また、日本語母語話者による聴取評価を踏まえた、音声分析による拍の等時性の実証を行ったことは、適切、且つ妥当であると判断する。

4. 論旨の妥当性

日本語教育、対象言語学、外国語教育、音響音声学の観点から、日本語特殊拍生成の特徴を全体構造的に考察して、従来から言われている拍の等時性を実証したとする論旨は、妥当

であると判断する。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

先行研究の内容に対する評価、専門用語の定義に関して不十分な点があること、また、文字表記、形式の統一、参考文献などにやや不備が見られることなど課題として残るが、これらは論文自体の内容や評価を損なうものではなく、論文の最終提出までに加筆・修正することを求めた結果、校正されたものと認めた。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

本論文の独自性、学術的に際立った点は以下の通りである。

- (1) 特殊拍の生成に関する研究を、語レベルだけでなく、フレーズレベル、文レベルまでその範囲を広げることにより、より詳細な発音指導が可能になると提言した。
- (2) 特殊拍生成に関して、日本語母語話者の時間長比がほぼ変わらずに近似しているのに対し、学習者では、特殊拍の持続時間は短くなる傾向がある。ただし、日本語学習者の学習レベルが向上するに従い特殊拍の持続時間はより安定し、学習歴と発音の向上とは関係していることを立証した。
- (3) 日本語母語話者は、フレーズ、文においても、持続時間がほぼ等しい比率で特殊拍を発音しており、音声分析を通して音響学的に「等時性」という日本語リズムの特徴が存在することを特殊拍の範囲にはあるが証明した。

以上の研究成果からも、筆者は、研究者、教育者として十分な資質を備えており、今後の日本語教育、特に音声教育の分野に大いに貢献するものと考えます。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重、且つ厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。